



図書館事務スペースの整備

●
加藤信哉

大学図書館の平日の夜間開館や休日開館は、かなり進んだといつてよいでしょう。また、学生の能動的学習を促すラーニング commons のような施設も普及しつつあります。学生が図書館に長時間滞在し快適に学習するためには、休憩のためのスペースや飲食の可能な場所が必要になることはいうまでもありません。最近、新館を開館した図書館、増改築をした図書館ではこれらに対する配慮が見られます。

それに対して、図書館の事務スペースは長時間開館に合わせて、どのように整備されているのでしょうか。ほとんどの図書館では、従来の施設・設備のままで、主に省エネルギーなどの運用面での工夫に留まっているように思われます。

利用者が図書館で長時間快適に過ごせるのと同様に、図書館職員が快適に勤務できる図書館事務スペース環境の改善を考えるべきではないでしょうか。何か特別のことが求められているわけではありません。例えば、照明を目に優しく耐久性があるものにする、休憩室の什器の一部をリラククスできるものに変えるなどは、それほど難しいこ

とではありません。この機会に経費と時間はかかりますが、例えば、事務室の空調を個別空調にすることやもつと踏み込んで事務スペース全体をユニバーサル・デザイン化することも検討されてよいでしょう。

なぜ改めてこのような主張をするかといえば、図書館職員が執務する図書館事務スペースの環境が、図書館職員にとって快適で使いやすいものでないと、利用者サービスを始めとする、より良い図書館サービスの展開につながらないと考えるからです。

更衣室がない、職員用トイレがない（利用者と共用）、職員の休憩スペースが狭く独立していないなどのいささか残念な事例も見聞きました。

今後、情報通信技術やデジタル化、AIなどの進展によって、図書館において、資料や人に割り当てられるスペースは減少してゆくと予想されますが、快適な環境の図書館事務スペースを継続的に整備することは、図書館サービスの基盤として不可欠であると考えます。